

■ 英雄の挽歌 ■

れた空と寒さに凍えるように林立する樹木の下、言峰は完全に身体をこちらに向けている。言峰はこの寒さに身を縮める素振りも見せず、精悍な雰囲気^{せいかん}をにじませている。胸に下げられた十字架が冬とそして言峰の厳しさを宿すように冷たく輝いていた。

「おまえはどうだ。望みはあるのか、ランサー」

「そうさな」

ランサーはしばらく考えこむ。バゼットといった時は、彼女の望みを叶えてやるのが目的だった。

「オレは思う存分闘えればいい。納得できる闘いができれば本望だ」

「二度目の生が欲しいとは考えないのか」

「そんなものに興味はない。くだらねえ」

言葉が強める意味をこめて、ランサーは槍を振るった。切り裂かれた空気が耳もとで冷ややかな音をあげた。

「なるほど。高潔たればこそその英雄か」

言峰が手を広げてみせた。納得したような態度だが、内心ではどう思っているのかわからない。

「で、オレは答えたぜ。おまえはどうなんだ、マスターさんよ」

ランサーの質問に、言峰は口端をあげて笑みを濃くし、「私に望みはない」

「な……」

あまりにあっさりとした言峰の言いように、ランサーは言葉を失った。

「私もおまえと同じだよ、ランサー。願望機としての聖杯にまったく興味はない」

「同じでたまるか。じゃあ、てめえは何のためにマスターになったんだ」

「聖杯を求める理由があるからだ。そのために、私は聖杯を見なければならぬ」

ちよつとした混乱に襲われた。理由はあるのに望みはないという、言峰の言わんとするところも、その意図もランサーには理解できない。理由とは望みではないのか、何のために聖杯を求めるのか、そもそも何も求めていないのか。そしてたかだかそんなつまらない理屈で、バゼットは殺されたのか。

言峰はあいかわらず優位に立つ者の笑みを見せている。握りしめた槍が震えているのがわかった。

バゼットが言峰に殺されたという事実は、百歩譲れば言